

にほんご にほんごきょういく けんきゅう  
日本語・日本語教育を研究する

せつぞくし ひんし だいにげんご ばあい  
接続詞というのは、なかなかやっかいな品詞です。第二言語の場合はもち  
ろん、ぼ ごしゅうとく むずか ぶるい はい母語習得でも難しい部類に入ります。接続詞は、せつぞくし ようじき げんごしゅう幼児期の言語習  
得でもとく おそ しゅうとく ひんし ひとっとも遅く習得される品詞の一つとされていますし、しょうがくせい小学生の  
さくぶん作文でも、「そして」や「それから」のような、ひと ふた き一つか二つの決まった接続詞  
つか たんちょう よしか使えないために、単調で読みにくくなっている文章をしばしば目にし  
ます。

にほんごがくしゅうしゃ さくぶん よ せつぞくし にほんごきょうし て い  
日本語学習者の作文を読んでいても、接続詞は、日本語教師が手を入れ  
じょうい はいたくなるところの上位に入るのでしょう。とくに、じょうきゅう ちょうきゅうがくしゅうしゃ上級・超級学習者  
さくぶん あやま めの作文で誤りが目につきます。これは、もちろん、じょうきゅう ちょうきゅうがくしゅう上級・超級学習  
しゃ せつぞくし まちが者だけが接続詞を間違えるということではありません。しょきゅう ちゅうきゅうがく初級・中級学  
しゅうしゃ さくぶん じよし習者の作文では、助詞をはじめとする他の文法的な誤りが多く、ほか ぶんぼうてき あやま おお そうたいてき相対的  
せつぞくし あやま めだに接続詞の誤りが目立ちにくいこと。また、しょきゅう ちゅうきゅうがくしゅうしゃ むずか初級・中級学習者は難  
せつぞくし さしい接続詞を避けるためにかえってまちが間違わないことなどの理由があるので  
しょう。

にほんごきょうし せつぞくし じしん  
日本語教師だからといって、接続詞に自信があるわけではありません。  
ふしぜん せつぞくし てんさく がくしゅうしゃ へんきやく不自然な接続詞を添削し、学習者に返却したところ、「なぜこの接続詞で  
せつぞくし

ないといけないのですか」と言われ、絶句することもしばしばです。学習者がくしゅうしゃ  
の指摘どおり、よく考えたらずつぞくしだいじょうぶきの接続詞でも大丈夫な気がしてくるときも  
ありますし、どうしてもダメだという場合でも、その理由をきちんと説明する  
ことは困難です。また、せんもんかきじゆつさんこうせつぞくし  
研究自体が遅れており、参考にすべき研究がなかなか見つからないのが  
現状です。

ただ、2000年代に入り、ようやく接続詞研究が質・量ともに徐々に増  
えるきざしが見えてきました。今回は、私自身の研究を例に、日本語の接  
続詞研究の一端を読者のみなさまと共有したいと思います。

「文章で使われる接続詞は、総文数の何割ぐらいにつくのですか」と私  
は学生達に聞くことがあります。みなさまはどのくらいだとお考えになる  
でしょうか。

この質問には、日本人学生は3から5割、留学生は2から4割と答え  
ることが多いようです。現実には1から3割ですから、いずれもそれを上回  
っているのですが、留学生のほうが正解に近いことがわかります。外国語  
として見ている方が正確に対象化できるのでしょう。

私が調べた範囲で接続詞の頻度をもっとも高いのは、①講義

さんじゅうろくてん きゅうパーセント に ろんぶん にじゅうごてん ごパーセント い か さん  
( 3 6 . 9 % )、つぎは②論文( 2 5 . 5 % )です。以下、③

じゅうさんてん さんパーセント よんしんぶん しやせつ じゅうにてん にパーセント ごしょうせつ  
エッセイ( 1 3 . 3 % )、④新聞の社説( 1 2 . 2 % )、⑤小説

じゅってん よんパーセント ろくしんぶん ななてん きゅうパーセント なな  
( 1 0 . 4 % )、⑥新聞のコラム( 7 . 9 % )、⑦ドラマのシナ

さんてん ぜろパーセント じゅん きょくたん おお ごかいわ こうぎ  
リオ( 3 . 0 % )の順になります。極 端に多いドイツ語会話の講義、

きょくたん すく たいわ べつ か ことば じゅっパーセント  
極 端に少ない対話のシナリオは別として、書き言葉ではせいぜい10 %

ぜんご おお ろんぶん ぜんたい よんぶん いち せつぞくし  
前後、もっとも多い論文でも全体の4分の1にしか接続詞はつきません。

せつぞくし じったい し さくぶんしどう きょうし ぶ き  
接続詞のこうした実態を知っておくことは、作文指導のさいの教師の武器と

なるでしょう。

にほん ごきょういくつうしん こくさいこうりゅうききん  
『日本語 教育通信 (国際交流基金)』